

# 絵画的で オブジェのようなデザイン。 水切れよく心地よく使える、 急須や醤油さし

静岡・伊豆高原

村上獎さん



暮らしを彩る器には、機能と遊び心のバランスが大切なように思う。デザインの遊びが少ないと、暮らしに潤いがなくなってしまうし、機能よりデザインが勝ちすぎてしまうと、いずれ片隅に追いやられてしまう。

村上獎さんの作品は、そのバランスをとともよく考えて作陶しているように感じる。例えば、急須や醤油さし。ころんとした球体に、ポット型の取っ手、短か



めの口が空を見上げている。陰影のある絵画的な風合いで、眺めているだけで、鼓動が高鳴る。醤油さしは、オブジェのよう。スターウォーズの世界みたいだねと言った人もいるとか。確かに、R2-D2のような…。と、眺めているだけで満足しそうだが、お茶や醤油を入れて注ぐと、水切れがとてもいい。見た目で惚れて、中身にも惚れると、もう、家族のように感じてしまう。

「見たことがないような形のものをつくりたいんです。でも、コップや茶碗の使いやすい形は、最も機能的な形に決まっています。使いやすさを考えながら、デザインで遊べるのは急須や醤油さし、花器なんです」と村上さん。

水切れのいい秘策とは？

まず、茶漉しの穴。穴を万遍なく開けた後、先を切った綿棒で、穴にひっついて余分な粘土を落とし、その後、竹串で裏もきれいに掃除をする。「開けっ放しだと汚いんです。それに茶葉のとおりも悪くなりますから」。急須本体にフリーハンドで穴を開け、茶漉しをつけ隙間を粘土で埋めてから、口の部分を合体させる。口をつける位置は、口の先が蓋より上になるように、そして肝心の水切れは、口の部分の厚みが重要なのだとか。「実は、この部分だけは、兄に教えてもらいました」。兄とは、陶芸家で急須の水切れの良さに定評がある村上躍さん。「兄弟として、最低限そこはクリアしておかないといけないなと思って」。

\*

村上さんの作陶歴は、まだ浅い。ミュージシャンを目指し、音楽活動をしたり、演劇、絵画にのめりこんだり、ときには飲食店で仕事をしながら、やりたいことを模索していたという。陶芸と向かい合ったのは、10年前に東京から伊豆に移り住み、仕事を探している時。体験陶芸の講師という仕事だった。「で

も、陶芸はしたことがなくて」。最初は、手びねりを覚え、お客さんも増えて、轆轤も教えるようになり、講師仲間でも本やネットで調べながらの試行錯誤の毎日。お客さんいろいろな質問されることを一つひとつ解決しながら技術を拾得していった。どうしたら、使いやすくなるか、どうしたらかっこよくなるか。シャープなものをつくりたい信念で、本格的に作品をつくらうと、5年前に独立した。

デザイン的にチャレンジをする時は、スケッチをする。「父が絵描きで、小さい頃から絵を描くのが好きだったんです」。デザインを考える時は、機械の部品、ネジ、歯車を参考にしたりもするという。「昔、乗っていたフォルクスワーゲンを解体した時の錆びた部品とか」。そうか、銅褐色の色合いは、錆びた部品をイメージしていたのか。

「まだまだオレは、発展途上」という村上さん。作品をつくるたびに、もっと使いやすいように、もっとかっこいいようにと改良していく。まだまだ変化しそうな作風、どんな作品をつくってくれるのだろうかという期待、これから目が離せない。



sho murakami

1968年、東京都生まれ。2001年に静岡県伊東市に移転し、07年より陶器製作をはじめ。11年、初個展。現在、個展、企画展を中心に活動している。

